7/28赤旗

# 維新・馬場代表 暴言は民主主義否定

**各界から批判談話**

日本維新の会の馬場伸幸代表の「日本共産党は日本からなくなったらいい政党」（23日、ネット番組）という公党の存在そのものを否定する、民主主義とは相いれない暴言に、メディアや政界から批判の声があがっています。各界の識者の批判の談話を紹介します。 ➡3面にも談話

## 戦争への道 徹底反撃を

総がかり行動実行委共同代表
**高田 健**さん

政党が政策について議論を交わすことは、市民にとって大事なことです。しかし、今回の発言は、議論とか批判するということではなく、その存在そのものを否定するもので、まったく異質のものです。憲法、立憲主義、民主主義に対する攻撃です。

かつてファシストは、反対する勢力を攻撃・排除し、侵略戦争に突き進みました。今回の発言は、民主主義を壊し、戦争につながる道です。

馬場氏は、今回のようなマッチョな発言が一部の人の賞賛を引くことを分かったうえで口にしていると思います。政治への不満が広がるなか、良い政権への批判をそらすことにもなってはいけないとも思います。

この発言を放置できません。徹底的に反撃することが必要です。これは共産党にだけ向けられた攻撃ではありません。かつてのナチス・ドイツでも共産党への攻撃の後に、宗教者などあらゆる人々が攻撃されました。

見過ごすことなく、市民の側も〝許さない〟と声をあげなくてはなりません。

## 自民極右と共通項 自認

横浜市立大学名誉教授（ドイツ現代史）
**永岑 三千輝**（ながみね みちてる）さん

馬場氏の発言は反共極右のものであり、日本共産党への攻撃というのにとどまらず、民主主義の否定という点であまりにひどく、あっけにとられるほどです。

自民党政府はずっと、日本共産党を破壊活動防止法にもとづく調査対象団体だとして暴力主義的な団体かのように攻撃してきたわけですが、馬場氏の発言は、自民党の反共極右部分と日本維新の会が共通項を持っていることを自ら認めたものでしょう。

「新しい戦前」と言われるような今の日本の状況とドイツの戦前の状況には違いもありストレートに結びつくものではありませんが、ナチズムの中にも反共主義は強烈にありました。

「連合赤軍」のような暴力的団体の存在が日本共産党への攻撃に利用されています。日本共産党はこうした攻撃に、繰り返し強く反論していくべきだと思います。

## 言論の力で包囲しよう

全労連議長
**小畑 雅子**さん

この発言を聞いたとき、びっくりしました。憲法も民主主義も踏みにじる発言であり、政党の代表が言うべきではありません。

憲法前文は、「日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動」すると宣言しています。選挙を通じて選出された国会議員を有する政党を「なくなったらいい」と言う。しかも、党として発言を撤回していません。日本維新の会の政党としての資質が問われると思います。

馬場代表の発言は、自らを「第2自民党」と認める発言とともに出てきました。いま、自民党は「アメリカいいなり」に「戦争する国づくり」、大軍拡を進めています。この動きを食い止める政党は「なくていい」というもので、まさに暴論を封じるものです。

この発言を許せば、戦前のような全体主義へとつながる危険があります。いま共産党だけでなく、多くの識者が「許さない」と声をあげています。言論の力で包囲し、撤回させることが大事です。

7/28 工夜

# 戦前の全体主義想起

京都精華大准教授 白井 聡さん

日本維新の会の馬場伸幸代表の「共産党は日本からなくなったらいい政党」という発言は、民主主義を否定する非常にひどい発言ですね。

議会制民主主義というのは、あくまで相手の存在を認めたうえで議論することで成り立ちます。そのために議会はあります。相手の存在そのものを否定してしまったら、議会制民主主義は成り立ちません。

歴史をさかのぼれば、共産党などの存在を否定するというのは全体主義の発想です。「日本からなくなったらいい」というところがまた戦前を想起させます。共産党を「アカだ」「非国民だ」といって弾圧し侵略戦争に突き進みました。特高警察や治安維持法を思い起こさせます。馬場さんは一体、戦前の強権国家を肯定しているのでしょうか。

戦後の民主主義体制は、こうした戦前の強権的な国家、全体主義を反省するところからはじまっています。馬場発言は、戦後の出発点を否定する発言だと思います。

ついでに言えば、馬場さんの「第2自民党でいい」発言は、ただただ率直な発言で、大阪の実態をみても「たしかに、そうだよな」と思わせます。

# 勝共連合と同じ発想

作家・法政大教授 中沢 けいさん

馬場氏の発言で、民主主義とは多様な政党の意見を必要とするという大正論なんか関係ないというのが維新の考え方だとはっきりわかります。同時に、野党共闘攻撃でもあります。おそらく、維新はいままでも共闘破壊のために、同様の発言を陰でしていたのではないでしょうか。党首が表立って発言し、発言撤回も拒否しています。民主主義は多様な意見の尊重を前提とするのですから、立場を超えて多くの人が怒りを表すべきだと思います。

馬場氏の発言は、反共カルト集団「勝共連合」の「共産党をつぶす」と同じです。大事な点は、勝共連合は「共産党をつぶす」だけではなく、「文化共産主義」と称して、LGBTのパートナーシップ制度や、選択的夫婦別姓を攻撃していることです。日本は西側の主要国の標準的なレベルの社会政策からどんどん遅れてしまう。日本社会を「封建制国家」に戻してしまうという考えです。馬場氏の発言はこんな思想ともつながっているのです。

# 維新・馬場代表暴言に批判

各界の談話

# 脅威論 反共デマ典型

上智大教授 市民連合運営委員 中野 晃一さん

維新の馬場代表が「(共産党は)なくてもいい」と発言したことは、共産党が実際に弾圧された政治史を知っていれば、ファシスト的で本当に許しがたい暴言です。小池晃書記局長が謝罪と撤回を要求したことに対し、馬場代表は「公安の監視対象だ」などと、議論をすり替えました。当初、揶揄していたのに反論されたら、共産党脅威論に転じるのは、まさに反共デマの典型です。

馬場代表は自らを「第2自民党」としましたが、この発言は立憲民主党も共産党もとるに足らない存在で自分たちの地位を確立させたと自信を深めたことの表出でもあります。いよいよ第1自民党と第2自民党だけの翼賛体制という流れが生じているのが現状です。

こうした状況が見えているいま、立憲野党が一つでも多くの議席を獲得し、政治のバランスを回復させるために、野党共闘の重要性は高まっています。

馬場発言に憤りを感じた人は共産党が一生懸命人々の命や暮らしを守るため活動していることを知っています。党の実際の姿から、偏見やデマをはね返すことがいま必要な対応ではないでしょうか。

# まともな反論力なし

コラムニスト 藤崎 剛人さん

自分たちと違う政治信条を持つ人たちに対し、「なくなったらいい」と公党の代表が公言してしまう。国民の分断と憎悪をあおる政治の帰結は、米国の連邦議会襲撃事件のような暴力的な争いです。

それを防ぐためにあるのが議会制民主主義です。政党間で政策を批判し合う権利はあるし、選挙になれば議席の奪い合いになります。他方で、それは相手の存在を認めた上でのことです。馬場代表の発言は、議会制民主主義の根本的なルールを否定するものです。野党の重要な役割は時の政権・与党をチェックすることです。一方で、維新は、「第2自民党」を公言し、野党としての役割を放棄しています。自民党を追認し、議論をしようとしない。維新の一貫した体質が今回の発言に表れています。

日本共産党の反論に対し、維新はその反論を全く踏まえずに「古典的な反共攻撃」を持ち出しています。まともな議論、反論をする力がないと言わざるを得ません。

日本共産党の小池晃書記局長が28日、国会内で、日本維新の会の控室に届けた抗議文は次の通りです。

## 維新への共産党抗議文

2023年7月26日

日本維新の会
幹事長 藤田 文武 様

日本共産党
書記局長 小池 晃

抗議文

日本維新の会の馬場伸幸代表は、7月23日に放映されたインターネット番組で「共産党は日本からなくなったらいい政党」と発言した。

政党の党首が、公党に対して「日本からなくなったらいい」と発言することは、民主主義を根本から否定する議論であり、断じて看過することはできない。

政党が他党の政策に対して批判し論争することは当然の権利だが、「なくなったらいい」と存在そのものを否定することは、民主主義を蹂躙するものであり、到底許すことはできない。

わが党は、民主主義の名において馬場代表の発言に対して厳重に抗議し、発言のすみやかな撤回を強く求める。